

宮脇綾子《はりえ日記》について②

—第4巻から第6巻まで—

西崎紀衣

本稿では『豊田市美術館紀要』No.10(2018年)に引き続き、創作アプリケ作家・宮脇綾子(1905-1995年)の《はりえ日記》(1972-90年、70冊)の第4巻から第6巻までの記載を起こしたものと、各該当頁の画像とを併せて掲載する。

約20年の間ほぼ毎日綴られ、貼り続けられた《はりえ日記》は、宮脇綾子のライフワークともいえる作品である。豊田市美術館では、2017年度の博物館実習の一環として《はりえ日記》の第1巻から第6巻までを文字に起こす作業を行った。6名の実習生*がそれぞれ1巻ずつを担当し、作家と作品および取り扱い方を事前の授業で学び、筆者を含む学芸員立会いの下、作業にあたった。記載がくずし字であり、学生たちには不慣れな旧仮名遣いや旧字体、異字体が含まれるため、1冊全てを起こし終えることは目標とせず、定められた時間内で行いうる範囲とした。本稿掲載の日記各巻は、学生が文字に起こした資料を校正し、学生が着手にいたらなかった後半については筆者が作業を行い、作業の終了後に、作家ご遺族に内容を確認いただいた。ご遺族との連絡、補足説明の聞き取りや記載内容の修正等は成瀬美幸が行った。

本稿で掲載する日記は下記の通りである。

はりえ日記 4巻:1973(昭和48)年 7月13日— 9月 4日、45頁

はりえ日記 5巻:1973(昭和48)年 9月 5日—10月20日、43頁

はりえ日記 6巻:1973(昭和48)年10月20日—12月 2日、43頁

《はりえ日記》第1巻から第3巻までの書き起こしについては、『豊田市美術館紀要』No.10(2018年)を参照されたい。

昨年度に引き続き、宮脇実保子氏、山川由美氏、嶋地奈美氏には多大なるご厚情を賜りました。あらためて心よりお礼申し上げます。

※2017年度豊田市美術館博物館実習生：井関千絵、岡本亜季、谷崎壮太郎、長坂有紗、長田詩織、山際妙子(五十音順)

凡例

- ・本文中の旧仮名遣い、旧字体、異字体、踊り字は原則として原文のままとした。
- ・本文中のカッコ等の記号は、原則として原文のままとした。
- ・レイアウト上の細かな改行は1行にまとめた。
- ・文章末の日付やサインは、行の下揃えとした。
- ・人名については註釈で解説しているが、一部調査が行き届かなかったものがある。

第四卷

中表紙

愚いつくまみに (四)

四十八年七月十三日 より
九月四日 まで

四巻 一一三頁 (図1)

生地にしてあるのは
杉村春子'さんから
いただいたもの
「朝鮮の麻」
この麻で私の帯を
作る

葉のついて居るのが
面白と思つたので—
『すもも』

七月十三日 作る
あ

図1 四巻 一一三頁

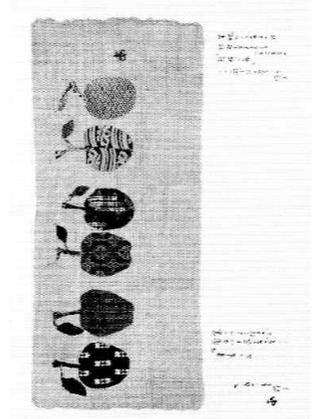


図2 四巻 四一五頁



七月二十日

四巻 四一五頁 (図2)

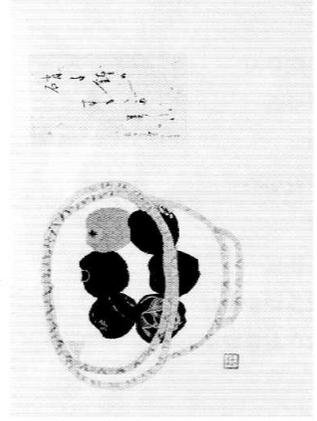
富士通さんから買った
北海道産×ロシ

四巻 六十七頁 (図3)

硝子鉢の
すもゝが
美しい

八月二十三日 つくる

図3 四巻 六十七頁

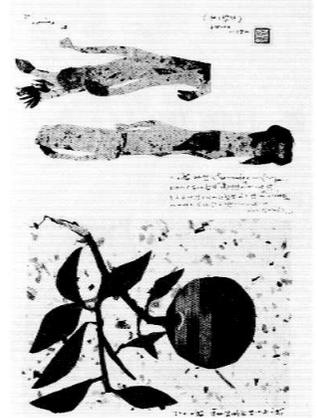


四巻 八十九頁 (図4)

『こと』

(古い作品)
七月二日
ここに貼る

図4 四巻 八十九頁



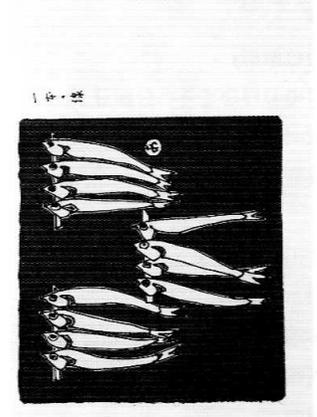
この紙 中津川『長多喜²』の主人より貰う
茶を入れる袋と色濃きところ苺
一かかえ位の大きな袋五つ位を『どうぞ』と
さし出された時の嬉しかったこと
十年以上前のこと

図5 四巻 一〇二頁

バックの紙 岐阜縣恵那坂下町³の紙

四巻 一〇二頁 (図5)

一本の線



四巻 二二三頁 (図6)

私が鉄を持つと
干柿を切るか
魚を切る
どうしてだらう
長い間に
知らない中に
くせ見たいなものに
なつて終つたのだらう

この二枚古い作品
筆習の中から出て来たもの

四巻 一四一五頁 (図7)

思いがけない布が
おもいがけなく生きる
美しさ

四巻 一六一七頁 (図8)

『三ヶ日の蜜柑』
額に入れるとこのバックの藍の
両耳が見えない 耳を見ると手織りが
機械織か判る

昨年十月三十一日
静岡県三ヶ日町
稚月浜名園にて
東海放送番組
懇話会あり

七月二十六日
ここに貼る

四八七三三つくる

図6 四巻 二二三頁

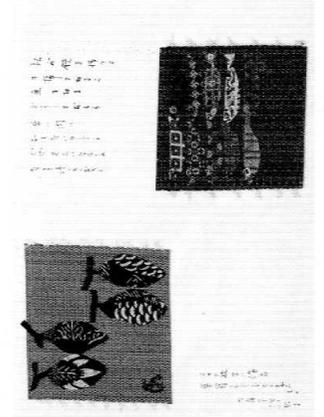


図7 四巻 一四一五頁

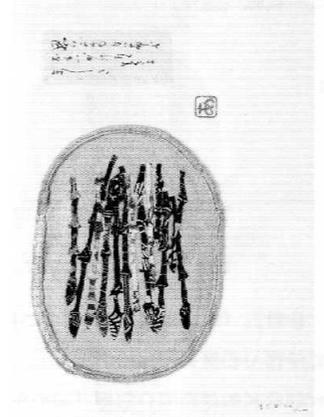


図8 四巻 一六一七頁



みかんがりの
 時 宿の主人から
 葉のついたのを
 貰う
 みかん園では
 いくら食べても
 よいが、外に
 持ち出すことは
 禁じられて居るので
 宿の主人に
 モデルにしたいからと
 言ったら
 下さった。

四巻 一八一—一九頁 (図9)

うちの庭からよく蝉がとび立つ
 せまいけれど
 やしきのまわりに圍いがわりに
 木が植えてあるからだらう
 庭に出て見たら柿の葉のうらに
 せみのめけがらがくっついて居た
 自然というものゝ神秘さを
 こんなせまいところで見つけた事が
 とても嬉しい

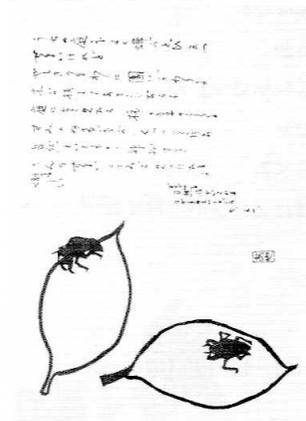
とんとん自然を破かいされる
 なげかわしいこのふる
 七. 三二.

四巻 二〇—二二頁 (図一〇)

『のうぜんかづら』

うちの庭に この樹がある
 この家を建てた頃
 (今から三十年位前)
 人さしゆび位のつる草だったのが

図9 四巻 一八一—一九頁



図一〇 四巻 二〇—二二頁



木の直径が
今二十センチ位の木キになって
先の方がこの様になって居る
風に弱い花で
少しの風で
蕾まで落ちて終う
ちよと強い風が吹くと それこそ
みんな落ちてしまったかと思う程
地面一ぱい散って居る
でも後から 後から 咲いてくれるので
毎日眺めるのが楽しみだ

通りに面して居るところに
咲いて居るので
通る人が皆
『きれいですね』と
褒めて行く
殆どどの人が
この花はなんという花ですか
と聞く

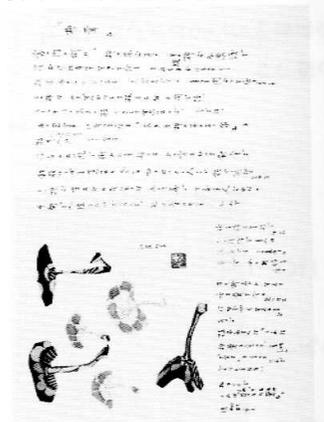
八月二日

四巻 三二二三頁 (図一)

『柳茸』

家の門の側に、柳の木がある その柳が不思議で
皮だけになって生きて居る それも縦半分になって一
植木屋さんに聞いたら 大丈夫ですよ ちよと肉がついて居るからと
この柳は のうぜんかづらを植えた時と同じ頃、
ステッキ位の太さの枝をさして置いたのが、今では
家の目じるしになって居る 『大きな柳の木のある家』と
私も私宅を訪れる人に、そう言う
昨年のたい風で倒れたのを起して 上の方を切って針金で
鉄柱にはばって置いたら 今年切り口のところから枝が延びて来た
この柳が皮だけになったのは五年前で 工度主人が胃の
手術で入院した時だったので、私は氣になって人知れず
祈るような気持ちで居た

図一 四巻 三二二三頁



お客様で主人は
細々ながら この暑さに
負けず 毎日制作して居る

その柳の下に生えて
居る草を今日見つけた
何時ぞやも生えたことが
あるが
植木屋さんは「これは
柳草と言って、美味しい
ですよ」と言っただけれど
食べたことはない
私は一人で
これは『芽出た草』と
決めて居る

四巻 二四―二五頁 (図1-2)

『一ヶ月前にもと子さんから貰った
ぶどう』

もと子さんが
自分の家の庭に
実ったと
まっさかの葡萄を
持って来て下さった
何と美しい色……
と思つても
その頃、展覧会
放送のことなどで忙しく
どうしても
モデルにする事が出来な
仕事部屋の
机の上に置いては
眺めて居る中に

八月四日

図1-2 四巻 二四―二五頁



だんだんしなびて来た
 そのしなび方が
 又 美しいので
 その儘にして居る中に
 今日になつて終つた
 忙しいことに変わりはないが
 思い切つて
 これをして見る
 もういるも形も
 干葡萄そのものに
 なつて居る
 蔭の方を
 ためしに摘んで
 食べて見たら
 何んと不味い!!
 味もそっけも
 ない。

四巻 二六一二七頁 (図13)

『ちやらんげん』 縞を使って

八月四日

㊤

八月六日

図13 四巻 二六一二七頁



四巻 二八二九頁 (図14)

萬里⁶を連れて、毎朝散歩。主人が引っぱって、私は糞とり。
 それがもう七年になる。この近くにお住いのある片山五郎⁶さんが
 『これは表彰ものですねー』と仰言つた。私が糞の仕末をするからたらこ
 その片山さんも先日急に亡くなった。
 犬の散歩と言っても私たち夫婦のていどいい散歩とも言える。足から年をとる
 というのでー
 散歩の道もコンクリートになり ところどころあつた原っぱも
 家が建つたり 駐車場になつたり⁷ 終つた。土のあるところは犬も喜んで
 入りたがる 土を踏むことを好むのは人間と同じだ
 家からしばらく行つたところに坂道がある その横に雑木林があつて
 木の美しさを主人と褒めたり それを楽しんで居たが 最近その木々も
 伐られ、ブルドーザー⁷入つて 土をならして居る
 あゝなんという自然の破壊よとなげきながら 段々變つて行くその様子を
 うらめしく見ながら通つて居たが、二三日前 その土地の隅の雑草の中に
 この屋敷を見つけた
 嬉しさとおはれみと
 こつちやな気持で
 これを取つて居た
 その日は描く暇が
 無かつたので
 今日、取つたのを
 描く

『道に咲いて居た屋敷』

四巻 三〇一三二頁 (図15)

『はたはたのひもの』

八月十九日作る

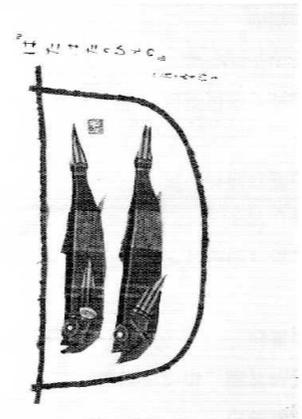
八月八日

あ

図14 四巻 二八二九頁



図15 四巻 三〇一三二頁



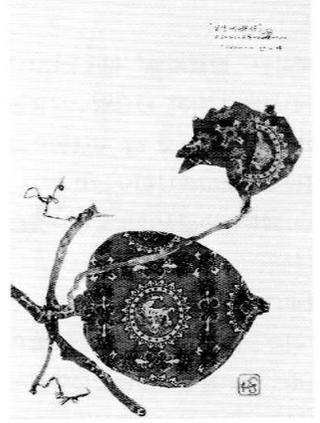
四巻 三十三三頁 (図16)

(北海道南瓜)

たかちゃんのお母さんから買ったもの

八月十二日 作る あ

図16 四巻 三十三三頁



四巻 三四一三五頁 (図17)

『京都の錦どおりで買った茄子』

「昨日

『中華人民共和国

出土文物展』を

見てから田美、奈美⁹を

連れて京都へ行く

はじめ 東寺の露店を

あさつて 又布を

いろいろ買う

それから博物館¹⁰で

中国展を見る

今更ながら中国から

受けた日本への文化の

影響思う

いろいろ私は私なりに

勉強になった

美濃吉¹¹で『吉山べんと』

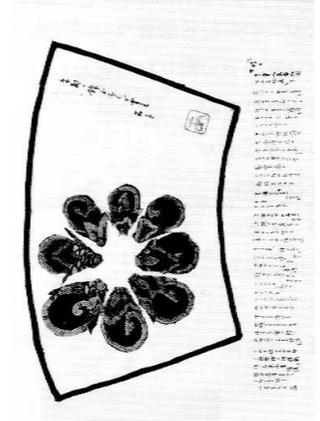
をとり

そこから車で

中村ちゃんきれ屋¹²さんに行き

沖縄の芭蕉布の

図17 四巻 三四一三五頁



きものなど買う
(楽しい事は 日記に書く)
そこを出て 錦とおりに向う
空が急に暗くなる
四時だというのに真暗
錦通りの近くまで来たら
ごろごろとかみなり
すごい夕立
アーケードがあるので
ぬれはしなかったが
買ものを済ませて
四條でタクシーを大分
待ってから乗り 駅へ
六時三分のこだまで帰宅

これを作り上げた時
高校野球の決勝戦が
県立広島商業優勝
静岡商業負ける
三時十五分終了

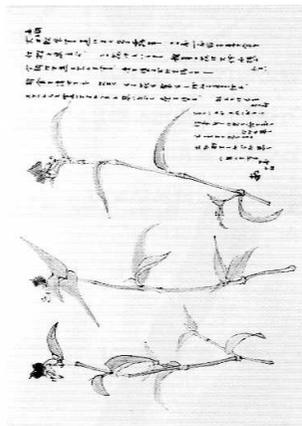
八月十二日 あ

四巻 三六―三七七頁 (図18)

毎朝
犬と散歩する道によく見る露草 この前一度取って来て写生
仕様と思つたが、この花はというより 雑草の花は大体水持がわるい
今朝は早速スケッチをする。色を塗るだけを残して―
朝食を済ませてから見たら もう花も葉もしぼみかけて居た。
スケッチして置いてよかつたと思いながら 色を塗る。 私たちはものを見る時
美しいとか きれいだとか
何げなしに見て居るのだと何時も思う。
ものをよく見ることの
大切さをしみじみ思う

八月二十七日
午前十時

図18 四巻 三六―三七七頁



四巻 三八―三九頁 (図19)

これは私の好きな作品
 五年位前に作ったものだが
 今日筆箱の引出しから出して見て
 ここに貼る。何か貼って見たくなくて
 毎年夏のはじめになると
 とくだみの白い花を見るのが楽しみだ
 それを見るとどうしても作りたくなる
 とくだみも段々少なくなつて
 近所の温気の多いヶに生えるところが
 あつたが
 そこもコンクリートでかためられ自動車置場になつて終つた
 この頃は、中津川の山の家
 行つた時か 誰かが持ってきて来て下さるのを
 見ては作る 昔から私の大好きな花……

これが一番小さく



これが中位で二つ同じ
 下が一番大きいら

ものの本に

十字花と書いてあるのもある

私がとくだみをつくりはじめて

随分月日が立つてから花と思つて

居たのはかくて 真中に

黄色のが小さい花の集まりだと

言うことを、図鑑で知つた

四巻 四〇―四一頁 (図20)

この花は『西洋ふうちよう草』と図鑑に載つて居るけれど

或るおとしを召した方が

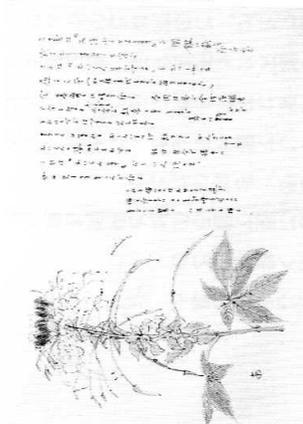
これは『おいらん草ですよ』とおこしやつた

庭に二本 (加藤葉代子¹⁾さんが苗を下されたのが)

図19 四巻 三八―三九頁



図20 四巻 四〇―四一頁



八月二十七日 記

今 真盛りに咲いて居る 唇間は色が全体薄桃色だけと
 夕方になるとふしぎと上の方が紅色となり その下が眞白になる
 それにしべがはつきりと見えて来る
 まさしく日晝れにおしろいをつけ 紅をぞし かんざしをぞした
 おいらんの姿を思わせる 私は自分で勝手に
 これは『おいらん亭』だと一人決めて、
 毎日見るのを楽しんで居る

これを描いたのは五時ちよこと過ぎ
 描いて居る中に その美しさを増して行くのに
 気がついて驚く

四卷 四二—四三頁 (図2-1)

(加藤美代子さん提供)

『今日モデルに使った いちじく』

二ヶ月振りに家のけいこはじまる

八月三十日描く

(九月四日)

図2-1 四卷 四二—四三頁

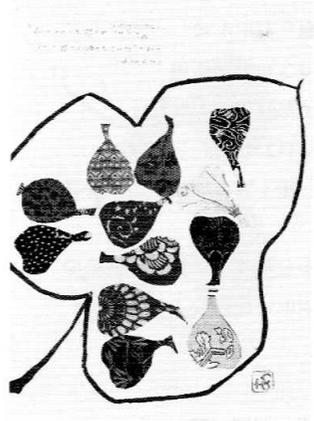


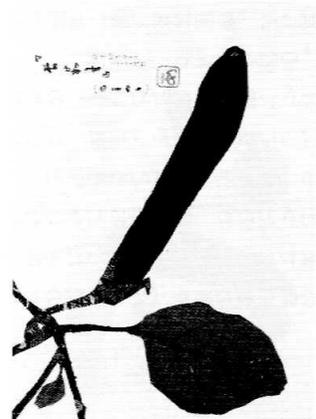
図2 四卷 四四—四五頁

四卷 四四—四五頁 (図2-2)

岐阜縣之谷産 たかちゃん提供

『長茄子』

(九月四日)



第五巻

中表紙

思いつくままに

四十八年九月五日 より

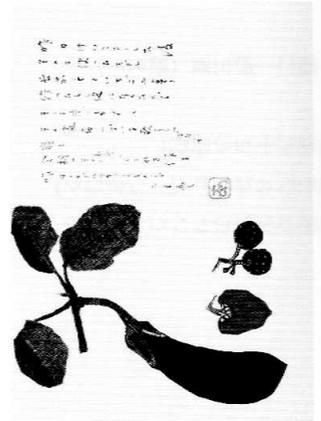
〃 十月二十日 まで

五巻 二二三頁 (図23)

昨日けいこをした後
 その日使ったモデル
 長茄子といちご二点を
 作ったら夜になったので
 そこを片づけずに
 その儘 布一ぱいを散らしっぱなしで
 寝る
 今朝のその部屋の中でこれを作る
 昨日のモデルの中のものから

九月五日

図23 五巻 二二三頁

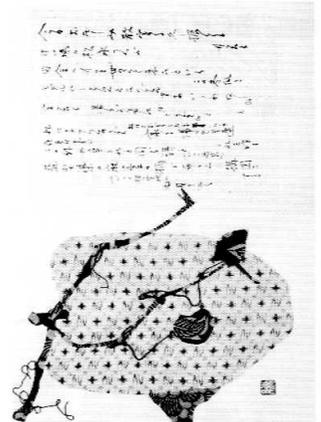


五巻 四一五頁 (図24)

今日おたしみに教室に久し振りに行ったら
 けい場^マの松永さんが
 田舎へ行って買って来たというこの冬瓜を
 モデルにして見えたので『まあ いいわねー』と
 言ったら 帰りがけに『どうぞ』と
 私に下さったので 私はこおどりしながらいただき 家に帰って早速これを作る
 夜更けまでに この他二点 これと同じ拵と(バック酒袋)
 藍型染の麻の葉の柄で(バック紺の生地)布の上に構図をする

九月十二日

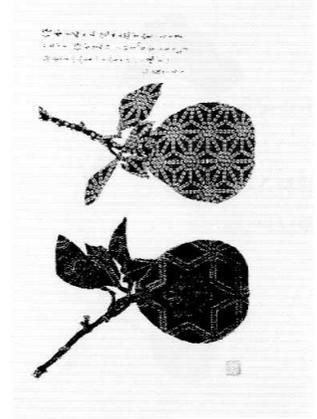
図24 五巻 四一五頁



五巻 六一七頁 (図25)

佐分¹さんのお宅の庭で実ったのを
いたゞく 佐分さんは これを『日本しもの』と
仰言る (今日¹の宮¹のけいこ場で)

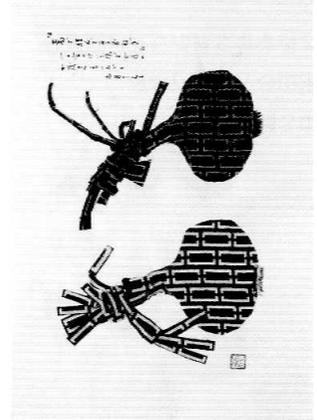
図25 五巻 六一七頁



五巻 八一九頁 (図26)

『薬で結んである玉ねぎ』
一の宮のけいこ場で女医の
加茂さんからいたゞく

図26 五巻 八一九頁



九月十三日

五巻 一〇一一頁 (図27)

(龍山のとうがらし)

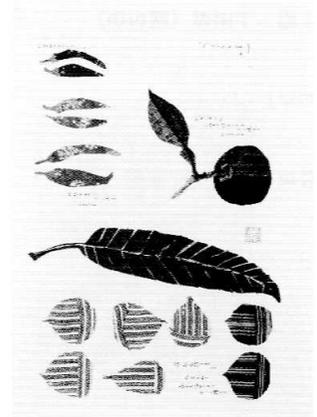
松坂屋友の会の
けいこ場にて
会員のより

(だいたい)

一の宮の佐分さんより

(九月十四日 写 あ)

図27 五巻 一〇一一頁



けいこ場にて

服部 露子さんから

毎日文化センター

けいこ場にて

五巻 一二一―一三頁 (図28)

佐分さん宅からいただいた二種類の
柑を 先日のと違った布で
敬老の日の翌日

五巻 一四一―一五頁 (図29)

『はつさく』

松坂屋の友の会の会員提供

九月十三日

九月十四日

九月十六日

図28 五巻 一二一―一三頁

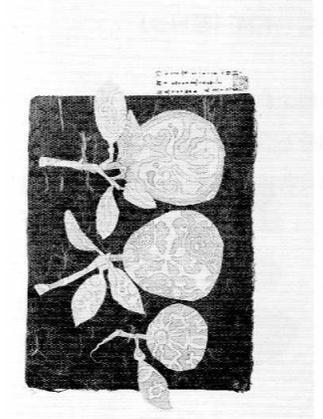
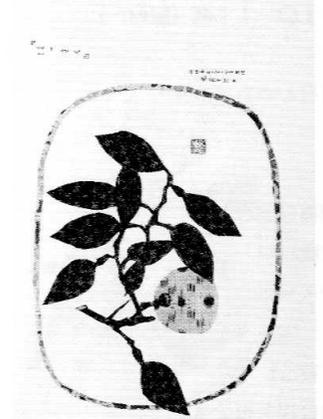


図29 五巻 一四一―一五頁



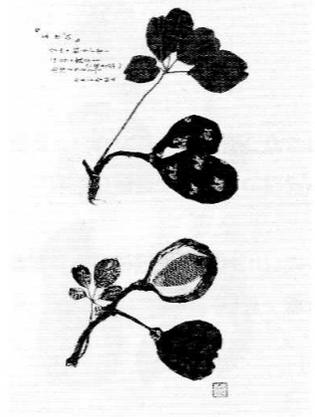
九月十六日

五卷 一六一七頁 (図30)

『あけび』
高山の朝市¹⁶で買つ
河岸の露店にて
(二枝五十円也)
雨降る九月二十二日

九月二十五日 貼之

図30 五卷 一六一七頁

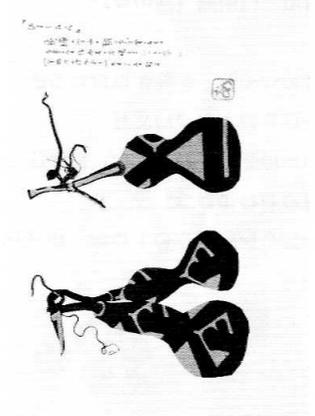


五卷 一八一九頁 (図31)

『ひょうたん』
飛騨の高山の朝市で買ったもの
九月二十二日 陣屋前の広場にて (二つ五十円也)
(実物は薄みどり)

九月二十五日 貼之

図31 五卷 一八一九頁

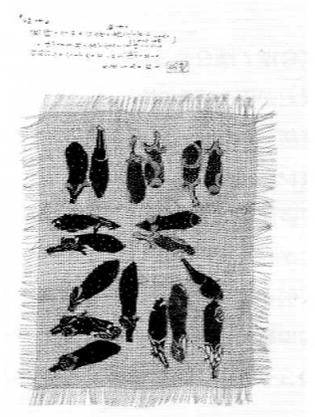


五卷 二〇一二頁 (図32)

『茄子』
飛騨の高山の河岸の朝市の露店で求む
(一ならく 百円三十五文)
この塩つけを桂¹⁷の家で食て美味しかった
買ったのが九月二十二日 今日で四日目 これからこれを漬けて見よう

九月二十五日 貼之

図32 五卷 二〇一二頁



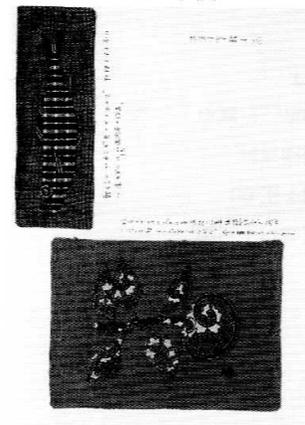
五巻 二二二三頁 (図33)

九月二十七日 貼之 あ

新しいいわしが良かつたので 料理をする前に
一尾モデルにした 一週間前の作品。

昨年十月に三ヶ日に東海放送番組懇話会で遊び
に行った時 ホテルで買ったみかん。今日筆筒からさがし出して。

図33 五巻 二二二三頁



五巻 二四二五頁 (図34)

家の庭のさくらが 今年今までない程
澤山実がなった でもこれは
びつくりする程すっぱいので 鑑賞用か
モデルにしかならない。
昨日枝を切つて来た中の一つを ちよつと貼つて見た

九月二十八日

図34 五巻 二四二五頁

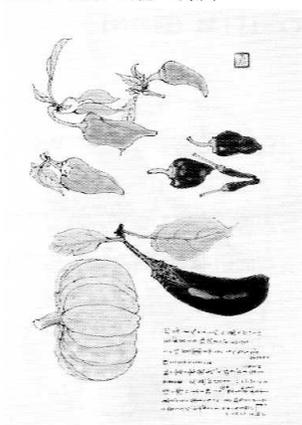


五巻 二六一七頁 (図35)

以前主人の所へ画のけいこに
来て見えた松田さんが来宅
この頃菜園をやつて こんなものが出来たと
持つて来て下さつた
我が家の雰囲気が好きだとしきりに言つて
又遊びに来ていいですかと
帰り際に念を押して居た 来年大学を卒業する
息子がある奥さんなのに 真紅なセーターを着て
可愛らしい人 (少女がそのまゝ大きくなった感じ)

十月三日記す

図35 五巻 二六一七頁



五巻 二八二九頁 (図36)

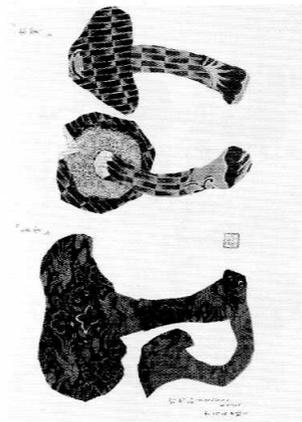
『松茸』

『香茸』

竹内和子³さんからの
おくりもの

十月三日 貼之

図36 五巻 二八二九頁



五巻 三〇一三二頁 (図37)

『ねぶりこ餅』

ねぶりこべるる	たぬきが出たよ
たぬきべろりし	うさぎになった
わらに澤山	おまつり見たい
ねんねんこるりと	お祭り見たい
せなかの赤ちゃん	ちよこびりなめた
ちよこびりなめたら	かえろこね
おしやぶりべるる	かえろこね

飛騨地方では、おしやぶりのことを

『ねぶりこ』と呼びます。手造りの

おもしるぞ

素朴な味わい。饗宴を誘う

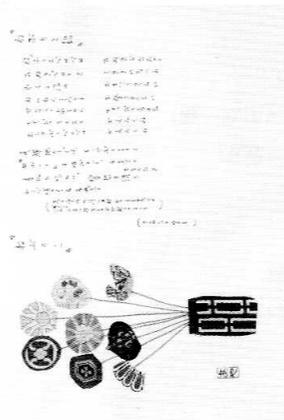
わらく唄のようなあめです

(先日高山へ行った時 買って来たもの
とニールの袋に右の様なことが印刷してあった)

『ねぶりこ』

(十月六日 写之)

図37 五巻 三〇一三二頁



五巻 三二—三三頁 (図38)

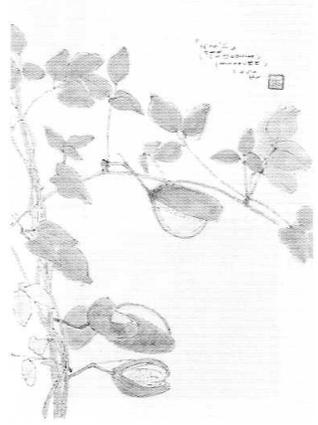
『あけび』

(岐阜県八百津久田見¹⁹の産)

(多木ちゃん²⁰提供)

十月八日 写生

図38 五巻 三二—三三頁



五巻 三四—三五頁 (図39)

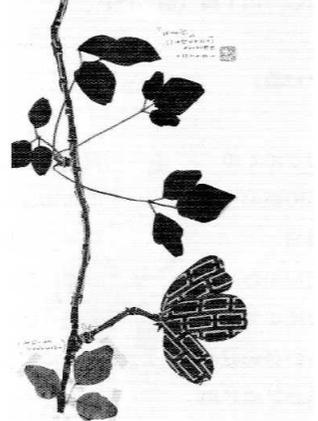
『あけび』

(八百津久田見の産)

たかちゃん提供

十月十日 写之

図39 五巻 三四—三五頁



(実物の葉

何時までもつやら)

五巻 三六—三七頁 (図40)

『はぜ』

二十年前の作品

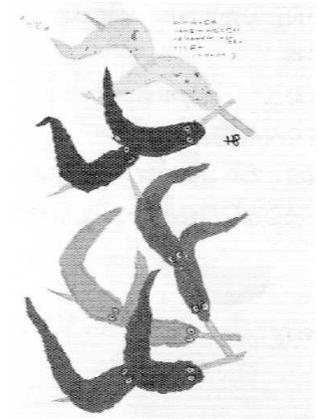
これを貼った色紙に澤山の

しみが出来たので それをはがし

ここに貼る

(十月十二日)

図40 五巻 三六—三七頁

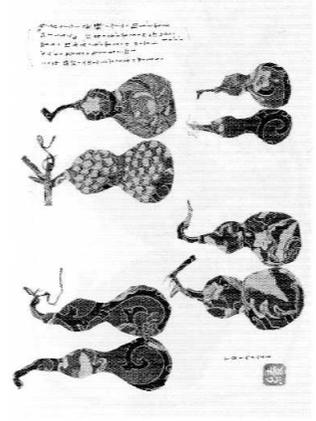


五卷 三八―三九頁 (図41)

九月二十二日 飛騨の高山の朝市で買った
『ひょうたん』 河岸の市で買ったのは薄みどりのままだが
翌日の陣屋前の市で買ったのは 口の方から
だんだん茶色になって来て居る
この布 稲沢の山内さんからすこ前に買ったもの

十月十四日写之

図41 五卷 三八―三九頁

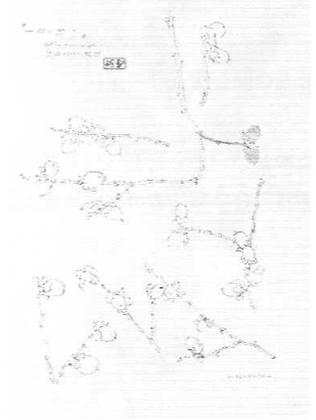


五卷 四〇―四一頁 (図42)

『しなの柿』
花がきとも言う
姫部志かさん提供

十月十五日写生

図42 五卷 四〇―四一頁



五卷 四二―四三頁 (図43)

月柿の庭の隅の木に
からまりついて居たやぶからし

十月二十日描く

図43 五卷 四二―四三頁



第六巻

中表紙

思いつくままに (六)

四十八年十月二十日より

〃 十二月二日まで

六巻 一二三頁 (図44)

中津川の山の家の柿 (しぶ柿)

柿の色がきたなくなつたが (これは失敗)

赤いいろは のりがしみると必ず色が悪くなるのを知つて居たのに

十月二十日 作之

図44 六巻 一二三頁

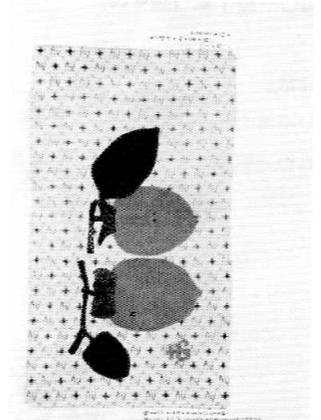


図45 六巻 四一五頁

六巻 四一五頁 (図45)

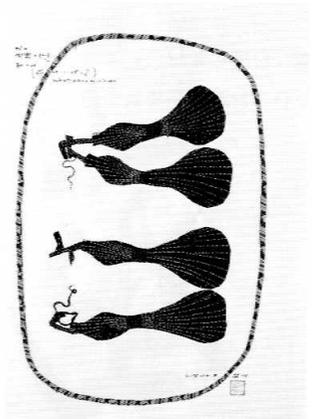
先日

飛騨高山で

買った (ひょうたん)

まだ薄みどりのままのがある

十月三十日 貼之



六巻 六一七頁 (図46)

十一月一日

山茶花が一ぱい庭に咲く

あたたかい日、千歳子^{ちとせこ}が届けくれた

『かれい』36cmもある大きなもの

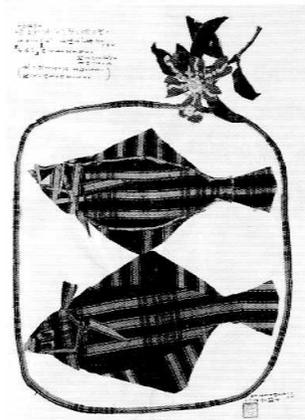
刺身にして食べる

美味しかった

(魚に使ってある布 京都の真寺の
露店で昨年の秋買ったもの)

刺身におろした後モデルにして

図46 六巻 六一七頁



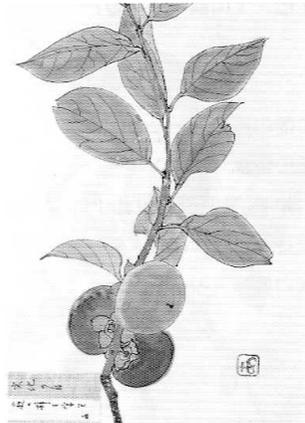
十一月二日貼之

六巻 八一九頁 (図47)

文化の日

庭の柿を写生

図47 六巻 八一九頁



あ

六巻 一〇一一頁 (図48)

三つ葉を切った根を水にさして

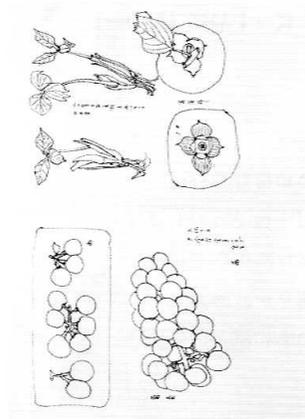
六日目

富有柿

文化の日

夕食后食卓の上で写生

図48 六巻 一〇一一頁



あ

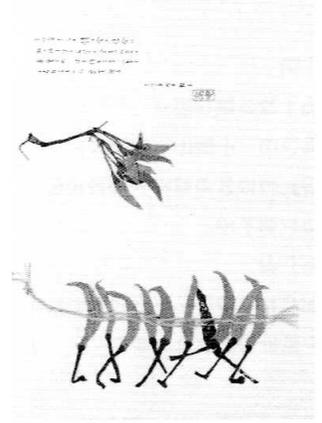
葡萄

六巻 一二―一三頁 (図49)

十一月十三日 綾の会の総会に
私の話を聞きたいとの会員の人たちの
希望とか。何を話そうかと一日中
そんなことを一人感て度る

十一月四日貼之

図49 六巻 一二―一三頁

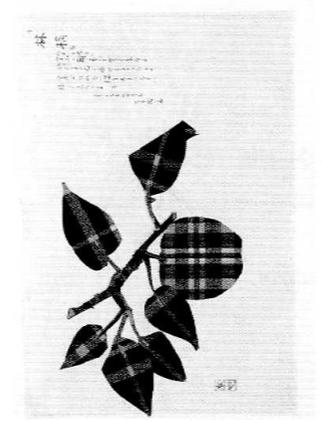


六巻 一四―一五頁 (図50)

『林檎』
四日 (日曜日)
高山の朝市で買って来たよ
五日に もとさんが届けて下さったもの
葉が取れない様に大事に大事に
持って来たのよ と……

葉がしおれかけた
七日貼之

図50 六巻 一四―一五頁

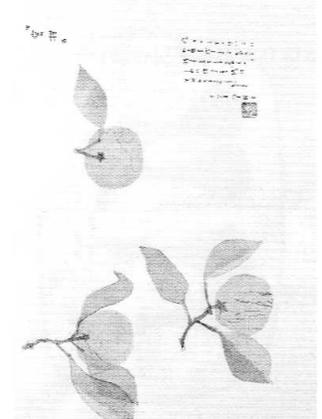


六巻 一六―一七頁 (図51)

『蜜柑』
昨日のうちのけいこに
加藤美代子さんがモデルにと
持って来て下さったもの
これに用いてある紙は
生田ひろ子さんからのおくりもの

十一月八日貼之

図51 六巻 一六―一七頁



六巻 一八一―一九頁 (図52)

『赤菜²³』

これも もと予さんが
高山の朝市で買って持って来て下さったもの
今日まで大事に
保存して置いて今日描く
少し新鮮さが無くなって居るけれど
(買って四日目)

『朴葉の上に』

赤かぶらと
小さな大根』

六巻 二〇―二二頁 (図53)

『阿けび』

(昨年の九月に作ったもの)
台は手摺き紙 (岐阜恵那郡坂下にて求めたもの)

阿けびに用いてある紙は
阪野年子²⁴さんが染めたもの
阪野さんのこうして染めたので
私の羽織を作って貰ったのが 四枚ある

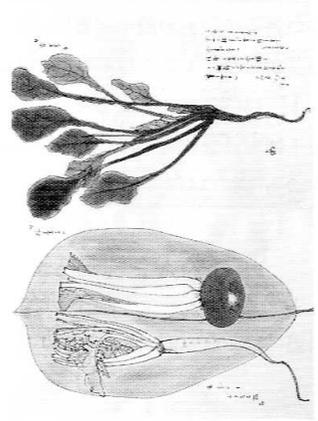
六巻 二二―二三頁 (図54)

『ぞくろ』

伊勢型紙の紙を使って。

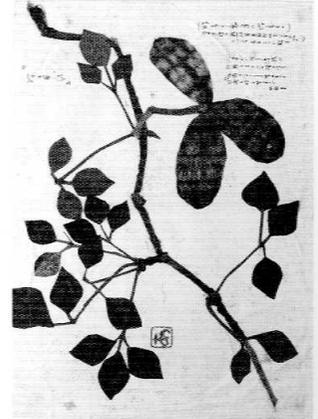
この紙は五年位前 鈴鹿の市長さん杉本²⁵さんからいただいたもの
伊せ型紙は美濃紙三枚を柿渋で貼って
三日間から一週間位 おがくすでいぶす(四四・一〇・二二 名古屋よしとで知る)

図52 六巻 一八一―一九頁



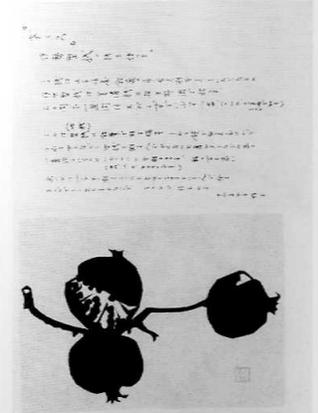
十一月八日 写之

図53 六巻 二〇―二二頁



十一月九日 ここに貼る

図54 六巻 二二―二三頁



これは型紙（地紙）に鉛筆で形を描いて それを鋏で切ったのだけれど
 これをやりながら型紙を彫る人がどんなに大変かをしみじみ思う
 一番細かいものは一センチに十本彫ること。頭の下る思い
 （四八 一・二 NHKテレビより）
 近い内に一度その彫るところを見せて下さるという人が居る
 テレビでしか見たことがないので、その日が待たれる

十一月十日 作文

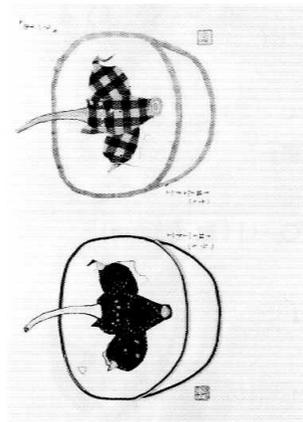
六巻 二四一三五頁 (図55)

『里いも』

十一月十一日 貼文
 (午前)

十一月十一日 貼文
 (午後)

図55 六巻 二四一三五頁

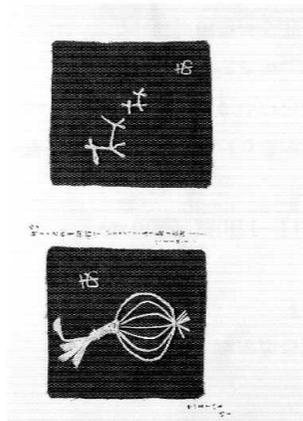


六巻 二六一二七頁 (図56)

昨日 神戸の近代美術館にて シヤコメツテイ展²⁶を観て感激……
 (こよりを使って)

十一月十八日 作文

図56 六巻 二六一二七頁



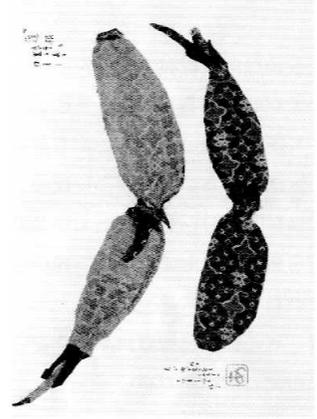
六卷 二八二—二九頁 (図57)

『蓮根』
同じ布の
裏と表を
使って—

夫が街で 昨日見つけてくれたもの

十一月十一日 作文

図57 六卷 二八二—二九頁



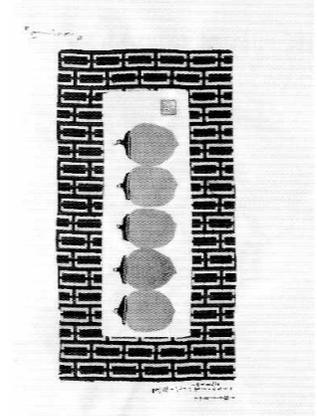
六卷 三〇一—三二頁 (図58)

『ほしがき』

蓮根と一緒に これも主人が買ってきたもの

十一月十二日 貼文

図58 六卷 三〇一—三二頁



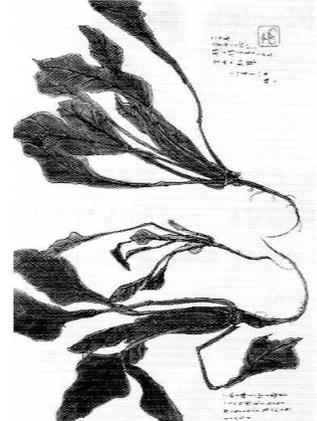
六卷 三二一—三三頁 (図59)

三日前
名古屋に出張で来た
桂が持って来てくれた
高山の紅葉あかぎ

これを描いて居る最中
いろんな用事で立ったり
座ったりしたので 気に入らない
ものになる

十一月二十八日 描く

図59 六卷 三二一—三三頁



六巻 三四一三五頁 (図60)

美しい いちごをいただいたので
 その様な布で作ろうかと思いつきながら
 ふと 一ノ宮の森さんからいただいた古い布を
 思いだし、箱の中から取り出して見る
 江戸時代まで行くのではないかと思われるものがある
 この作品の中にも そんなものがあるのぢや
 ないだろうか
 いちごは 久し振りに尋ねて下さった
 田口久枝さんが下さったもの

十一月二十八日

六巻 三六一三七頁 (図61)

これも 一ノ宮の森さんからいただいた布で

十一月二十八日

六巻 三八一三九頁 (図62)

『茄子』

ずっと前 作ったもの。ある模様を生かしたのだけれど、染の様ですね
 或る人に言われた そのものずばりなので ちょっと気にはなつて居たのだけれど
 こんなことをして見るのも『布と遊ぶ』のこの頃の私には、それもいいのだと
 思ったりする

十一月二十九日 貼之

図60 六巻 三四一三五頁



図61 六巻 三六一三七頁

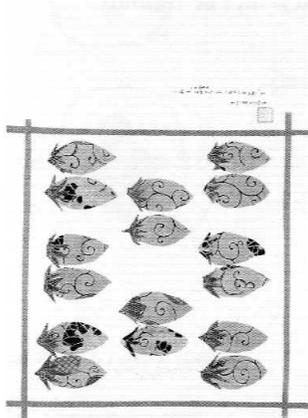
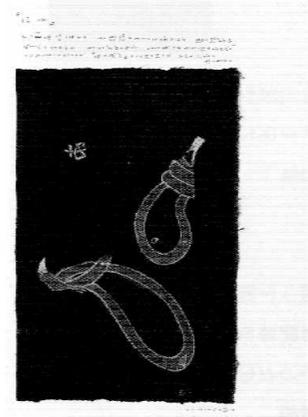


図62 六巻 三八一三九頁



六巻 四〇—四二頁 (図63)

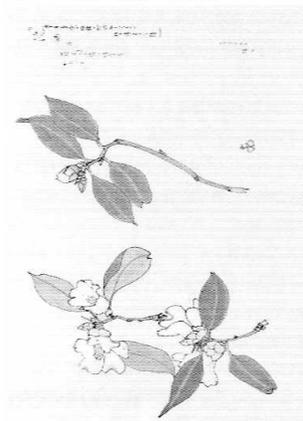
(豊臣秀吉の征韓の折佐助というものが 持ち帰ったという権)

『佐助』

萩本さんのお宅に咲いたのを
いただく

十一月二十九日 描之

図63 六巻 四〇—四二頁



六巻 四二—四三頁 (図64)

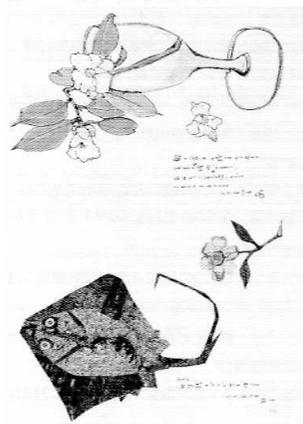
朝の食事が終わってふと見ると
食卓の『佐助』が美しい
あわたしい中で描いたので
うまくかけなかった

十二月一日 あ

今日の新聞紙のクレープを使って

十二月二日 貼之 あ

図64 六巻 四二—四三頁



註

- 1 日本を代表する新劇の女優(1906—1997)。文学座の中心として活躍するとともに、小津安二郎監督作品をはじめとする映画にも多数出演。杉村春樹した布で襦子(襦子)が制作した(襦子の布(襦子))(1933)などを所蔵していた。
- 2 夜から山荘 長多喜。岐阜県中津川市の夜に建て、旧民家を用いた和洋旅館。閑静な佇まいで文人墨客を惹いた。
- 3 岐阜県高田郡坂下町。現岐阜県中津川市坂下。
- 4 ストロングタケモノキ。昭和から戦後にかけては織機、特にヤマキやハノキ製の柱木に染まる。
- 5 高橋夫妻の嫁ぐ夫側の作品にも描かれている。
- 6 愛知県立大学教授。英米文学研究、サンタクロース研究で知られる。
- 7 佐藤多木子。高橋家と長い間家事手伝いをし、襦子を助けた。
- 8 「中華人民共和国出土文物展」(会期：1972年9月11日—10月30日、会場：京福国立博物館)。
- 9 高橋夫妻の孫。長女と襦子の娘たち。
- 10 京福国立博物館。
- 11 江戸時代から続く高級の高級呉服店。
- 12 (株)中村らとせれ店。京都市東山区にある明治創業の古呉服。江戸時代のものを中心に染し布を扱ったことから「珍蔵展(ちとせれや)」と呼ばれる。
- 13 岐阜県井田村(現在は廃村)に建てた襦子のひらり。
- 14 高橋夫妻の長女(1898—1933)の庭。
- 15 岐阜県高田郡。
- 16 岐阜県高田市の毎日行われる朝市。陣屋前広場と尾川沿いのところから開かれる。
- 17 高橋夫妻の長女、三人姉弟の第三子。
- 18 織の会展二回展から出展した山添谷参堂。「織の会」山添谷グループ。
- 19 岐阜県川島郡(旧高田町)田島。
- 20 註を参照。
- 21 岐阜県中津川市にある高橋夫妻の別荘の庭の様子。
- 22 高橋夫妻の長女、三人姉弟の第三子。
- 23 日輪織の別荘。
- 24 名古屋市在住の染織家。樹日本新工業家理研会員。
- 25 当市の織機市展(本誌展)(会期：1946—1982)。
- 26 「シヤロメニア展」現代彫刻の巨匠(会期：1973年9月11日—11月25日、会場：岐阜県立近代美術館(現岐阜県立美術館))。
- 27 中国産産のアナト子科の野果。高橋家。和名は紅葉花(くはなばな)。